

介護における二人称関係の成立

－高齢者と協働する介護－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
上田恵理子

低賃金で重労働，不規則な勤務，それに加え慢性的な人手不足。介護福祉職者を取り巻く環境は決して良いものとは言えない。そんな中でも一生懸命に目の前にいる高齢者の暮らしを良くしたい，と必死に介護を行っている人たちが沢山いるのもまた事実である。

そのひとたちは，介護現場で何を見て何を感じ，介護の仕事をし続けているのだろうか。本論文はいきいきと介護の仕事をしている人に焦点を当てることで，介護福祉職者にとっての介護の意義を捉えていく。

インタビュー方法は半構造化面接を用いた。本論文で扱ったデータは①16名分のインタビューデータと，②筆者が記述したエピソード，第三者から筆者がインタビューしてもらったテープ起こししたものである。語られた話を逐語に起こし，KJ法に基づいて分類した。

結果は，6つのカテゴリーに分類することができた。介護福祉職者として得る高齢者との関わりだけでなく，一人の介護福祉職者が一人の高齢者と出会い，相互変容していく場面が見られた為，この論文では介護福祉職者を「わたし」，高齢者を「あなた」と名乗ることにし，その二人の関係を「二人称関係」とした。

はじめは介護される・するという関係だったが，人生の経験や知恵を教える・教わるという関係となる。そして様々な感情を協働し，「わたし」と「あなた」となる。その後，どちらでもない好い加減の関係となっていく。そしてその関係ができた後に「あなた」からもらう感謝の言葉や笑顔，「あなた」との関係から見るチームケアや，家族との関わりが介護の仕事を継続させる潤滑油となっていた。また高齢者との辛い別れもあるが，そこから得る後悔も自分自身の成長につなげ，新たに出会う「あなた」へと引き継がれていた。

実際は介護を受けているひとと介護を行うひとであり，構造的な力関係が完全に無くなるわけではなく，ここで話を聞いた人はやりがいを持って働いている人であるため，すべての介護福祉職者が当てはまるわけではない。だが本論文では高齢者「あなた」と介護福祉職者「わたし」は好い加減な関係にあった。それは，二人の関係の間に信頼や愛情，サービスや福祉のこころといったものを置くことでその関係にバランスを保ち，好い加減の揺れを作り出し，その心地よい位置が互いの居場所ともなっていくことが示唆された。